

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、著者が意図したところを反映しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

| No. | タイトル | 著者 | 書名(出版社) | 初出年/月 | ページ数 | 要旨 |
|-----|-----------------------------|-------------------------|---------------------|--------|-------------------|---|
| 0 | 「愛の試み」初出と書誌 | — | 福永武彦全集 第4巻 (新潮社) | — | 1 | ・ 初出:「文藝」昭和31年(1956)1月号より6月号まで連載。題名「新恋愛論」 ・ 単行 1.「愛の試み」1956年6月 河出書房 2.「愛の試み愛の終り」1958年3月 人文書院 3.「愛の試み愛の終り」特製本。1959年5月 人文書院 4.「愛の試み愛の終り」新版。1969年6月 人文書院 5.「愛の試み」新潮社文庫版。1975年5月 (詳細省略) |
| 1 | 「愛の試み」初版首尾 | 福永武彦 | 同上 | 1956/6 | 3(全集 以下同 じ) | (「初めに」より引用) 僕はただ、人間が生きるために他者を求めて行くその魂の願いのようなものが、生きるための人間の希望の一つであると考え る。僕が愛という場合に、それは常に孤独と相対的なもの、人間の根源的なものである。 僕はただ愛の発生から終りに至る過程を、一愛の意識、その持続、その作用、その世界を、僕なりに観察してみたいと思う。 (「終りに」より引用) 僕は観念的な人間だし、世に流行している肉体的な恋愛とはまったく異った立場に立って、これを書いた。現象面としての愛より も、愛の形而上的な意味を探ろうと努めた。 |
| 2 | 「愛の試み愛の終り」初版 序 | 福永武彦 | 同上 | 1958/1 | 2 | (引用) 愛は個人的な問題であり、それを一般的、形而上学的に論じることは簡単ではない。僕自身の考えも次第に変化するだろう。し かしこの二つのエッセイは、僕の現在までの精神的主題を、直接的に証明している筈である。ヴァリエーションを含んだその全 体的な様相は、僕の書いた小説の類によって見てほしいと思う。 |
| 3 | 「愛の試み愛の終り」新版 序 | 福永武彦 | 同上 | 1969/4 | 2 | この本は恋愛の指南書でもなく失恋の特効薬でもなかった。ただ愛と孤独について、嘗て一人の人間が苦しみつつ認識した ことのつつましい報告にすぎない。 僕はその後こういう種類のものを書かなくなった。その代りに今までに書いた小説は、存外この中にある主題の延長、挿話の ヴァリエーションにすぎないような気もする。僕にとってこのエッセイは、謂わば自作自解のようなものである。 |
| 4 | 本書裏扉に掲げられたエビ グラフ、福永のコメント | 『旧約聖書』 「雅歌」第三 章、一 | 同上 | 1956/6 | 1 | 夜われ床にありて我心の愛するものをたづねしが尋ねたれども得ず。 (福永によるコメント:『愛の試み』最終章「愛の試み」最終段より引用) これは人間の持つ根源的な孤独の状態を、簡潔に表現している。この孤独はしかし、単なる消極的な、非活動的な、内に鎖さ れた孤独ではない。「我心の愛する者をたづねしが」—そこに自己の孤独を豊かにするための試み、“愛の試み”がある。その 試みが「尋ねたれども得ず」という結果に終わったとしても、試みたという事実、愛の中に自己を投じたという事実は、必ずや孤 独を韋くするだろう。それは徒らに、救いの来るのを望んでいる孤独ではない。愛によって自己の傷の癒されるのを待っている 孤独ではない。孤独の方が、愛に向って、愛を求めて、進み出て行こうとする、そうした精神の一種の行為なのだ。愛が失敗に 終っても、失われた愛を嘆く前に、まず孤独を充実させて、傷は傷として自己の力で癒そうとする、そうした力強い意志に貫か れてこそ、人間が運命を切り抜けて行くことも可能なのだ。従って愛を試みるということは、運命によって彼の孤独が試みられて いることに対する、人間の反抗に他ならないだろう。 |

2. 単行本

| No. | タイトル | 著者 | 書名(出版社) | 初出年/月 | ページ数 | 要旨 |
|-----|----------------------|-------|--------------------------|---------|------|--|
| 1 | 『愛の試み』における《充足》への《充実》 | 鳥居真知子 | 時の形見に 福永武彦研究論集 白地社 | 2005/11 | 21 | 既出論考2.1、2.2を参照しつつ、エビグラフに掲げた「雅歌」の続きに注目し、母との繋がりによる《孤独》の《充足》への、他人への《愛》を通しての《孤独》の《充実》による回帰願望がエッセイの根底にあると考える。 (引用) 福永は《愛》は「繰返し」であると言う。「求め」て「求め」て「繰返し」続けるのである。しかしこの際限がないような《愛》の「繰返し」にも行き着く所はある。それは人間が死ぬ時である。福永は人は「恐らくは孤独のうちに死ぬだろう」と述べる。彼はその時、人生で為し続けてきた他人への《愛の試み》により、誕生時と同じく《充足》した《孤独》のなかで亡き母のもとへの帰還を果たすことを希求しているのである。 福永のこの願望はさらに、その《生》と《死》の「同一性」の背後にある、《生》と《死》をも含んだ渾沌とした、《孤独》＝《魂》の「古里」への想いにもつながっていくのである。そこは《孤独》の《充足》をもたらす亡き母のいる「妣の国」でもある。 |

2. 文芸関連雑誌

| No. | タイトル | 著者 | 資料 | 初出年/月 | ページ数 | 要旨 |
|-----|---------------|------|-------------------------|---------|------|---|
| 1 | 福永武彦における愛のかたち | 安藤元雄 | 国文学 解釈と教材の研究 特集 福永武彦 | 1972/11 | 7 | (引用) 著者によれば、愛は肉体の問題ではなく、精神の問題でもなく、《魂》の問題であり、しかも魂はその一つ一つが孤独のうちにあるのだから、愛の試みとは《自己の孤独を豊かにするための試み》にほかならない。このようなプラトンのアイデアとしての愛のとらえ方は、そっくりそのまま、著者の小説—このエッセイより前に書かれたものをも、それ以後に書かれたものをもつらぬいて—における「愛」の主題を、他のいかなる言葉よりも正確に解き明かすものとなっている。 |
| 2 | 「愛の試み愛の終り」 | 米倉巖 | 解釈と鑑賞 47巻10号 特集＝福永武彦 | 1982/9 | 6 | (引用) いわば、本著は、福永武彦という作家のあやなす諸々の作品の、《自作自解》にほかならず、福永論展開のための原点をなすことになるのである。 福永武彦の(本書の裏扉に掲げられた「旧約聖書」の「雅歌」の一節についての)論評には、《孤独を韜くする》《愛を求めて、ほとばしり出て行こうとする》というような能動的精神がみえる。そしてこういう《精神の一種の行為》こそ、福永文学の核になっているのは、いうまでもあるまい。 |

3. 新聞、文庫/全集 解説他

| No. | タイトル | 著者 | 資料 | 初出年/月 | ページ数 | 要旨 |
|-----|---------------|------|----|-------|------|--|
| 1 | 「愛の試み」新潮社文庫解説 | 竹西寛子 | | 1975 | 6 | (引用) このエッセイの中で、私が心にとめていた言葉は少なくない。少ない中から、一つだけというなら、「孤独の充実」を選ぼうか・「孤独の韜(つよ)め」にも通う言葉である。 運命によって、人間の孤独が試みられていることへの人間の反抗が、つまり愛の試みなのであり、実は隔離されるべきものでなく、溢れ出すべきもの、持続すべきもの、アイデアの世界に飛翔しながら地上を見詰めていることを、たやすくはないが、愛は要求しているとみる作者にとって、その折々の孤独の充実、投げ出されることで始まった人生を、優越感にも劣等感にもまどわされないうで、問いながら、逃げも下りもせず、人間の名で生きる条件とされているように思う。「愛の試み」とは何と象徴的な題名ではないか。 |